

このごろの書を見てみると、字をこしらえているというような感じがする。

もちろん広い意味では字はたしかにこしらえているのであるが、個性を出せる卒意の書がよい、あるいは法を出ると本物になる——などと、書法を批判するかのように見せつつ、何か自己弁護めいた言葉も聞く。

実はみな本当なのである。どの言葉も大切なことをいっているのである。

だがしかし陶冶しない個性だけで、芸が成り立つものかどうか、法を出るといふからには、その法にまずは入っていないければ、出るといふことはあり得ない。

法を問うているうちに法に拘束される。そのうちに法の真髓に触れ、法の真の活用がわかってくる。出るでも入るでもない、法は全く束縛などしていない。自分に力が足りなくて、法が利用できないだけのこのようである。

ばかに利口そうなことをいって見たが、実はつね日ごろ何か書いているたびに、もう一歩というところでどうも吹つきれない。そこで筆をおいて眺めている。二、三日眺めている。初めのうちは、書けない書けないという焦燥がついてまわって、一向に見当もつかない。少し日が経つとフト客観的に見ることもできる余裕が出てくる。なんだア——あそこをこうすればよかつたんだ、と気がつく。

全くバカバカしいくらいのが見当たらないで、墨と紙ばかり、というより身心を勞していたことが、みずから晒したくなる日々である。

お恥ずかしいことであるが、五十何年朝夕筆を持つ商売で今なおこの状態である。ただ少し気がつたことを申せば、以前よりは充分のつく時間が速くなって、運のよい時には書いてある間に、フトこの突破口が見つかる時もある。ところがおもしろいことにこれは

自分でものを書く場合のことで、他人が書いているのを見ていたり、またその書いたものを見ると、案外即座にその急所が見つかるから、皮肉でもあり不思議である。

他人のことはいなくても、自分では実践の難しいことがしみじみ判るのである。いい年をしてまだこんなところにウロウロしているのである。

日本に書が入ってきて三、四百年もすると、日本仏教の宗祖方の中に、きわだつて書の優れた方が出てくる。

その遺墨を見ながら、書かれた年代を考えてみる。私などよりずーつと若い時代に書かれたもの、しかも書家などという專業ではない。宗乗（学）の研鑽とか濟世とかの大理想に奔走されている。その要件の中で書かれたもの、見たたのしむなどという閑文字ではない。

それが書の方から見ても、燦然たるひとつの典範となるような存在であり、また千年の鑑賞にも耐えるほどのものなのだから、全くもって恐れ入る他はない。

気がつかないわけではないのである。一体それはどういふことか、ご伝記などを見れば中国で何を学んだとか、あるいは誰の弟子であつたとか。大変熱心であられたとしても、学ぶ幅から考えると、到底今日の比ではないほどのものであることが記されている。

今日六十代、七十代の年齢になつた者でも、古い時代の四十代、五十代に書かれたものには及ばない。口の達者な者にいわせれば、むかしは暇が多かつたんだ——などと放言している。

実際そうだろうか。むかしでも大きな足跡を遺した人は、そんなに暇がなかつたかと思われてならない。（つづく）

〈『大法輪』、昭和四十五年十二月〉

『筆間雜記』中村素堂隨筆集（昭和六十三年刊）より転載。